

■ 報告 ■

岩手県障害児授業研究会報告

中山文雄*

(1990年1月20日受理)

Fumio NAKAYAMA

A Report of the Iwate Society of Teaching Handicapped Children

I 成立経過

岩手県障害児授業研究会は、去る昭和62年3月7日(土)に発足した。

発足の経過について、次に記したい。筆者は、障害児教育における授業の改善・充実を指向した授業研究の一方法として、精神遅滞児教育での授業分析の研究¹⁾に取り組み、特殊学級や養護学校において授業を参観し、授業記録(VTR)をとらせていただいた。その際に授業者と授業に関して話し合う過程で、授業の改善・充実を図るためには授業分析等の研究に取り組むだけでは不十分であることを痛感させられた。

そして、授業分析等の授業に関する研究は、それが基礎的研究であっても授業実践に反映させ、実際の授業の改善・充実に結びつけていくことが肝要であり、そのためには授業研究のあり方を、稲垣忠彦氏が提言²⁾しているごとく、「実践と研究とを架橋」し、「それがプロフェッションとしての発展を支える」ような取り組みを筆者は構想してきた。

このような筆者の構想は、養護教育実習の折などに、佐藤静夫氏(岩手県立気仙養護学校校長、前岩手大学教育学部附属養護学校副校長)と話し合った際、佐藤氏も教師の力量を高めるため現場における授業研究の必要性を強調し、自主的な授業研究会を組織化したいと言うことで両者の意見は一致をみた。

昭和60年、国立特殊教育総合研究所精神薄弱教育研究部(部長 宮崎直男)を中心として、『障害児の授業研究会』(会長 宮崎直男)が組織され、同会主催の第1回『障害児の

*岩手大学教育学部養護教育学科

授業』研究会が昭和60年7月、国立特殊教育総合研究所を会場にして開催されるとともに、研究誌『障害児の授業研究』（1～15号まで季刊、16号から隔月刊。明治図書）が刊行された。

このような障害児の授業研究に関する全国的な研究会の結成及び研究誌の刊行に刺激され、加えて宮崎氏から同研究会への参加並びに岩手県にも研究会を結成し、相互提携していきたい旨、佐藤氏及び筆者に呼びかけがあった。

この宮崎氏の呼びかけを契機として、冒頭のごとく昭和62年3月、本研究会は発足をみるに至った。発足に当っては、佐藤氏と筆者が発起人となり、次のような案内状を岩手県内の特殊学級及び養護学校関係者に配付した。

岩手県『障害児の授業』研究会結成のご案内³⁾

何年か前までは、障害児の授業研究、とりわけ精神薄弱の授業研究などと言うものなら、「それぞれの学級の事情が違うのに、授業研究をしてもどうしようもない。」などと一笑に付されたものでした。(中略)むしろ精神薄弱児だからこそ、それにふさわしい授業のあるべき方法をみんなで創出すべきではないでしょうか。(中略)今、必要なのは毎日繰り返す授業の中で、一人ひとりの子どもすべてを学習活動に引きつけるためにはどんな働きかけを、どんなかたちで組み立てればよいのか。

また、一人ひとりの自発性を促すための教材づくりはどうあればよいか等、教師と子ども達のふれ合う場面を主テーマに話し合い、改善の方途を見い出していくことではないかと思えます。

『障害児の授業』研究をもっと身近なものとしてとらえ、授業を通じてものごとを考え、授業を通じて主張し、確かめ合い、相互に力量を高めていく、そんな魅力づくりを忘れてはならないと思えます。

『障害児の授業』研究会の中で、

- 実際の授業を参観したり、VTRを見たりしながら授業を中心とした研究会を開きたいと思えます。
 - 参考となる文献をみんなで読み合ってみたいと思えます。
 - みんなで検討した記録をもとに、『障害児の授業』を編集刊行したいと思えます。
- 是非おさそいしたいのでご案内します。

本研究会の趣旨、活動内容等に関しては、上記の文の中に概ね示されているが、昭和62年5月の第1回役員会で、次のような昭和62年度の活動計画を決めた⁴⁾。

(1)研究会の開催

- ①定例研究会（提案、授業分析、研究協議、講義等）
- ②第1回岩手県『障害児の授業』研究会（授業公開、研究協議、VTR授業分析、講演等）

(2)講演会の開催（障害児の授業研究法について）

(3)資料刊行

- ①授業研究会便り
- ②指導案集

(4)調査研究の実施

研究会結成当時の会員は、小・中学校の特殊学級、養護学校の教師を主に30名であった。そして、筆者が会長、佐藤静夫氏と菅野達雄氏（大野村立大野小学校長、前盛岡市立大慈寺小学校教頭）が副会長、中村仁子氏（岩手県立総合教育センター研修主事、前岩手大学教育学部附属養護学校教諭）が事務局長となった。

II 研究会活動の経過

本研究会は発足して4年目を迎えるが、これまでの主な活動は次のとおりである。

1 昭和62年度⁵⁾

(1)定例研究会の開催

本研究会は、会員による定例研究会を主活動としているが、昭和62年度は〈学習意欲のもたせ方の工夫〉をテーマとして、年間4回実施した。

定例研究会では、1回当たり1～2授業例を取り上げ、授業の提案（指導案及びVTRによる）、それに対する話し合い（研究協議）を中心に2時間30分から3時間30分程度の所要時間であった。

話し合い（研究協議）では、次の観点をおさえて進めた。

- ①授業で児童生徒が意欲的に取り組んだ要因（又はマイナス要因）は何か。
 - 授業の構想
 - 本時のめあての妥当性
 - 指導内容の適切性
 - 一人ひとりの活動の促し方
 - 展開の工夫
 - 教材・教具の工夫

②授業の改善のポイントについて

等できるだけ焦点化することによって、研究協議の具体化を意図した。

(2)第1回岩手県『障害児の授業』研究会の開催

定例研究会の経験を生かし、会員だけでなく県内外の特殊教育関係者に呼びかけ、昭和62年8月28日（金）に開催した。

全国規模の研究会は、上記のごとく国立特殊教育総合研究所で既に開催されていたが、地方で開催したのは本研究会が初めてであった。

研究会は盛岡市立仁王小学校（特殊学級）及び岩手大学教育学部附属養護学校における授業公開の後、附属養護学校を会場として講演会（宮崎直男氏『精神薄弱児教育と授業研究』）、その後3分科会（1. 日常生活の指導、2. 生活単元学習、3. 特殊学級教科の指導）に分かれて提案及び研究協議が行われた。

研究会には、県内はもとより、広く県外からも158名という予想以上の参加者があった。そして、特殊学級や養護学校の教師だけでなく、保育所や幼稚園の保母・教師、それに一般の主婦（障害児をもつ親）の参加もあり、障害児の授業に対する関心の高いことを再認識させられた。

(3)資料刊行

①会報『障害児の授業』刊行

論説、会員の意見、情報交換、事務局だより等内容として、B4版1枚で年間3回発行。

②研究会報第1集刊行

第1回岩手県『障害児の授業』研究会報告を中心にまとめられた。25頁。

尚、全国的な『障害児の授業研究会』編集の『障害児の授業研究』第10号は、岩手県障害児授業研究会の結成記念特集号として編集されている⁹⁾。

以上のような本研究会の昭和62年度（結成初年度）の活動は、2年目以降の研究会活動にも踏襲されて現在に至っている。

第2年目以降の経過については、初年度の活動と相違する活動内容等についてのみ記すことにする。

2 昭和63年度

第2回岩手県『障害児の授業』研究会の開催

今回の研究会では、前回の研究会主題〈学習意欲のもたせ方の工夫〉を発展させて、〈より良い授業の展開を求めて〉を主題とし、平成元年1月18日、岩手大学教育学部附属

養護学校を会場として開催した。

今回は授業公開はなく、午前・午後と引き続いて4分科会（1. 日常生活の指導、2. 生活単元学習、3. 作業学習、4. 教科の指導）に分かれての提案・研究協議を重点的に行った。分科会終了後、全体会において各分科会の報告とまとめが行われた。

参加者は準備等の関係もあって、県内だけに限定し、特殊学級及び養護学校の教師等80名であり、会員以外にも前回に引き続き参加した人もいて、研究会の継続・発展性の大切さを痛感させられた。

3 平成元年度

第3回岩手県『障害児の授業』研究会の開催

平成元年8月30日（水）、岩手大学教育学部附属養護学校を会場として開催した。今回の研究会主題は、前回同様〈より良い授業の展開を求めて〉とし、一層の発展と深化を図ることをねらいとした。

今回は岩手大学教育学部附属養護学校の全クラスの授業公開の後、午前・午後にまたがって4分科会（1. 日常生活の指導・遊びの指導、2. 生活単元学習、3. 作業学習、4. 教科の指導）に分かれての提案及び研究協議が行われ、最後に全体会で各分科会の報告とまとめが行われた。参加者は県内外から合わせて80名で、内容の充実した研究会であった。

尚、本研究会役員については異動等により、昭和63年度は副会長の菅野達雄氏から竹林克彦氏（岩手大学教育学部附属養護学校副校長）へ、そして平成元年度は向田弘作氏（盛岡市立松園小学校教頭）へ、事務局長は昭和63年度より栗生沢淑子氏（岩手大学教育学部附属養護学校教諭）へと、一部交代している。

Ⅲ 成果と今後の課題

本研究会も結成以来3年経過し、4年目を迎える。

年間4回の定例研究会、そして年1回の会員のみならず広く一般の参加者をも対象としての岩手県『障害児の授業』研究会の開催も継続し、内容面で充実してきていることは成果と言えよう。さらに、定例研究会や岩手県『障害児の授業』研究会における発表・提案資料（指導案、VTR記録等）も蓄積され、その活用が図られていることも貴重な成果と言えよう。

一方、今後の課題としては、研究会組織の拡充と活動の一層の充実があげられる。

研究会活動の充実の一環として、平成元年7月全国的な研究会『障害児の授業研究会』と、本研究会を含め各地研究会との第1回連絡協議会が開催された。今後、全国的なレベルでの研究情報の交換等により、研究内容面での一層のレベル・アップを図っていきたい。

注

- 1) 研究の成果は、中山文雄「精神遅滞児養護学校・特殊学級における授業分析の研究」『岩手大学教育学部研究年報』Vol. 44, No. 1, pp. 99-112, 1984.
同「精神遅滞児教育における授業分析の研究」『特殊教育学研究』Vol. 33, No. 4, pp. 16-27, 1986. に所収。
- 2) 稲垣忠彦『授業を変えるために—カンファレンスのすすめ—』国土社, p. 99, 1986.
- 3) 1987. 2. 19付 案内状より。
- 4) 岩手県障害児授業研究会「第1回授業研理事会資料〈S62. 5. 11〉」
- 5) 岩手県障害児授業研究会『研究会報第1集』25p. 1988.
- 6) 『障害児の授業研究』第10号に掲載された本研究会々員の論文は次の通りである。
 - 中山文雄「精神遅滞児教育における授業分析」pp. 5-10.
 - 中村仁子「主体的な活動を促す生活単元学習の展開の工夫」pp. 29-34.
 - 阿部由貴子「絵話『三匹のこぶたプーフーウー』」pp. 53-58.
 - 佐藤静夫「学習意欲を高めるための授業の条件」pp. 65-70.